

竹とともに生きるまちへ

～千里ニュータウンの「国風化」～

約50年前にまちびらきをした千里ニュータウンは、もともとは竹が生い茂っていた丘陵地だった。質の高い住宅の大量供給のために大阪府によって作られた千里ニュータウンには、今でも、数ヶ所の公園内に竹林が残っている。少ししか残っていない竹林のこの町に対する重要性和可能性を私は提案したい。

全体のマスタープランを綿密に練り上げ、計画的な町として作られた千里ニュータウンは非常に優れた住環境を備えている。道路は広く、100%歩車分離式で、歩行者専用道も多く設置されており、町の道路率は20%を



優に超えている。商業地区と住宅地区が完全に分離され、それぞれの地区で周辺よりも厳しい建築基準が設けられている。また、町の中のいたるところに公園や街路樹などの緑地が作られており、公園緑地率は24%と、国内では最高水準である。植樹後50年たつため、植えられた木は大きくなり、季節ごとに美しい情景を見せてくれる。また、道路、公園、学校、図書館、公民館などを住民のための施設をすべて含めた公共施設用地は全面積の約53%と、住環境としては、申し分のない水準である。

しかし、住んでいる人たちが問題を抱えていないわけではない。建物の老朽化で立替の時期がきており、すでに千里のあちこちでマンションの立替がなされている。この立替に伴い、町の初期からずっと住んできた人たちがいるところに、新たに若い人々が移ってきているのだ。そのおかげで町の子供の人口は近年増加に転じている。しかし、新しい人々と、従来から住んでいる人々の間には、あまり接点がないため、交流が乏しいのが現状だ。この町に住む小学生～大学生で、近所で名前を知っている高齢者が一人以上いる人は、ほとんどいない。私自身、1年前まで近所の知り合いなど、同年代を除けば、隣に住む人だけであった。ほとんどの人が、学校や塾に通ったり、友達と遊んだり、大阪の中心部に出かけたりすることで日常生活は終わってしまう。若年層と地域の人々との接点がないのだ。

この状況は問題だ。私はここで、「竹」という千里特有の環境を有効に活用することで、この問題の解決策を出せると思う。千里ニュータウンには、竹林を自主的に管理する、「千

里 竹の会」という市民団体がある。この団体は、2003年に作られ、今まで豊中市から千里中央公園の竹林の管理を任されてきた。「千里 竹の会」の発足時からいたメンバーによると、最初は竹林と呼べる状態ではなく、たくさんのごみや、竹の密集しすぎで、不健康



な竹が多かったそうだ。しかし、整備を続けるにつれ、だんだんと竹林と呼べる、健全な竹が育ってきたらしい。また、竹やぶ「千里竹の会」は毎年、「たけのこ狩り」を実施している。これは、私の住む地元・新千里東町の親子を募集して、自主管理している竹林にはえるたけのこを参加者に狩らせてあげる

行事で、毎年 300 人も親子が参加している。「千里 竹の会」のメンバーのほとんどは高齢者であるが、こういった行事を通じて、若い人々との交流が図れるのだ。

また、千里の公園の竹は他のところでも活躍している。去年から行われている「千里キャンドルロード」は、数万個というろうそくを公園に並べ、その明かりを楽しむ、という行事であるが、そこで使われるろうそくの入れ物に一部、竹が使われている。竹にろうそくを入れて並べた風景はとても幻想的で、竹の数に限りがあるため全面での使用はできなかったが、紙コップが使われたほかの部分よりも、多くの観客に好評であった。



このように、竹林は活用すれば、地域をつなげる非常に有効な材料となる。地域の人々で共有できる財産になるのだ。

しかし、千里のこの他の地域では、残念なことに、竹林の伐採が進んでいる。新千里東町地区のすぐ近くにある上新田地区では、マンション建設のため、8ヘクタールの竹林が伐採された。この

竹林は正確には千里ニュータウンとして計画された地区には含まれないため、千里中央公園の竹林とは異なり、ただ手付かずのまま残されていたのだ。この豊かな竹林は、公園の

少ない上新田地区にとっても有効活用できる緑地であったはずだが、結局なくなってしまった。伐採の話が知られてから、伐採反対運動が行われたが、そのまま伐採は進んでしまった。しかし、新千里東町のように、住民が竹林を活用し、それによってその町での暮らしが良くなっている、ということだったなら、伐採はされなかったのではないだろうか。少なくとも、竹林の一部を、千里中央公園のように、公園の一部として残しておくことは可能だったはずだ。

私は竹林の保護だけを訴えたいのではない。竹林をという地域固有の環境を保全するとともに、その環境資源を活用して、暮らしに役立てることを提案したいのだ。

竹林を活用して、様々な行事をすることで、若い人々と高齢者をつなげることができる。今までは同年代の若者の知り合いしかいなかったのが、竹を通じて、地域の高齢者との接点ができる。さらには、「千里 竹の会」などのメンバーは竹細工が非常に



上手であり、交流を通じて、竹とんぼや竹馬などの遊びの技術を高齢者から子どもへと継承できる。これは、自分とは全く関係のなかった趣味を始める、ということではなく、自分がいつも通る通学路の横にある竹林で開催されるイベントに参加する、ということになるため親しみやすく、参加しやすく感じられる。また、このように竹林を生かすことで、良い住環境に欠かすことのできない緑地も保護・維持できるのではないだろうか。住民がこれだけ活用し、地域に大事な竹林を伐採することにはならないだろう。

環境は保護するだけでなく、活用することが大事なのではないだろうか。日本には昔から里山があった。里山では、人々が手を入れることで環境は維持され、またその人々も里山からの恩恵を多く受けていた。日本には、環境を活用し、またそうやって活用することで環境の保全にもつなげてきた歴史がある。同様に、竹林を放置して、伐採されても仕方がない状態にするのではなく、管理・保全をしつつ、活用することで、参加者は日本の古くからある竹の文化を楽しむことができ、今まで接したことのなかった人々がつながる。日本最古の物語と言われる『竹取物語』でも、かぐや姫は竹の中から生まれているが、これからの千里ニュータウンは欧米の考え方で計画された町を、日本人にあった「国風化」していく必要があるのではないだろうか。それにより竹林の保全・維持に意味が与えられ、地域の住環境の向上にもつながる。こんな町を私は提案したい。